



佐高生 夏の陣 —夏季休業も充実—

○夏季休業明け全校集会

7月27日からの24日間の夏季休業が明けた8月19日、全校集会。今井健晴校長から「充実した学習時間を過ごせた人も、つまらなかったと思っている人も、どのような夏休みであったとしても、自分で考え過ごした夏休みだったのだから、それがよいのです。夏休み明けも、新型コロナ感染症をしっかりと防止して、夏休みの経験を学校生活に生かしていきましょう」と、生徒一人ひとりの目を見ながら健康安全指導も含めた講話がありました。

夏季休業中も、進路講習や部活動に充実した時間を過ごし一回り大きくなった佐高生。秋からの学校生活での成長もまた楽しみです。3年生の進路は、9月16日から就職試験が開始となり、いよいよ就職・進学・その他希望の進路の決定に向けて動いていきます。



○夏季休業期間中の進路講習

2・3年生を中心に、国公立理系、国公立文系、私立文系の大学進学
の他、公務員対策など多岐にわたる進路希望に合わせて基礎力増強及び実践的な講習を行いました。

国語科、英語科、数学科、理科、地理歴史科・公民科にて実施しました。各講習の人数は、1人であっても開講することを徹底し、生徒の意欲と努力に教職員が寄り添いました。これもまた、佐呂間高校の強みです。



○T-base (遠隔授業配信センター) の進路講習

長期休業期間中における有朋高校からの配信による講習は、昨年に引き続いて実施し、夏季休業中は全配信14講座のうち、本校では1年生を中心に国語表現、数学Ⅰ、数学A、標準英語、発展英語の4講座合計20時間の配信を受けました。この事業は、T-baseの「夢は地元でつかみ取る」による取組の一つで、長期休業期間中における進学向けの進路講習で、地域連携特例校等のみで受講することができます。日頃の授業のように双方向の送受信と異なり、希望する学校への全道同時配信となるため、概ね一方的な配信となりましたが、受講者に行われた4段階

のアンケート(よい・まあよい・よくない・わるい)の結果は、国語:全員が「よい」、数学:「よい」50%「まあよい」50%、英語:「よい」75%・「まあよい」25%となっており、生徒にとっては一定の達成感があったようです。また、遠隔の進路講習を受けたことにより、対面授業(いつも学校にいる先生方から受ける一般的な授業)が、よりわかりやすいと再認識できたという生徒もありました。

昨今、スタディサプリなど民間からの学習や進路関連の配信の蓄積・分野も広がってきていますが、遠隔装置やクラウドシステムを活用した一定の集団に対するICT活用は地域連携特例校だからこそ先取りできる体験でもあり、参加した生徒はChromebook(現在、校内には11台)を活用した新しいスタイルの学習のしくみも楽しんでいるでもありました。まだ始まったばかりの遠隔地間による講習は、同時配信の学校が空気感を共有する等には不便さがあります。更に来年からのGIGAスクール構想においては、授業者と受講者が共にTry & Error(挑戦と不具合)を楽しみながら乗り越えていく逞しさや成長も期待されるところであります。

性教育講話 DV(2年生)

7月19日(月)5・6時間目、性教育講話を実施しました。今回は、2年生を対象として、DV(ドメスティックバイオレンス=家庭内など限られた関係における暴力)を取り上げました。NPOのウイメンズ北見より講師をお迎えし、講義やワークショップをしていただきました。生徒たちにとっては、自分も他人も尊重する関係や距離などを考える機会になったようです。

佐呂間高校では毎年、学年別に性教育講話を実施しています。



進路講話(2年生)

7月21日(水)、2年生の総合的な探究の時間に進路学習を実施しました。この日、「自分の生き方や在り方について考える」をテーマにワークショップなどを行いました。講師に、オホーツク教育局教育支援課のキャリアプランニングスーパーバイザー(進路相談員)の野島康恵さんをお迎えしました。

AIの進化や、コロナ禍により、この1年で社会が様変わりしてしまいました。生徒たちが、自分を見失わずに逞しくなやかに生き抜くため、高校生として今をどのように過ごせばよいか、主体的に考える機会になりました。



9月の主な予定

1(水)~3(金)	前期期末考査	21(火)	看護説明会
9(木)~10(金)	夏季体育大会	24(金)	生徒会役員選挙
13(月)~14(火)	高体連テニス新人戦	25(土)	強歩大会
14(火)	進学相談会	26(日)	情報処理検定
19(日)	吹奏楽局定期演奏会	27(月)~29(水)	高体連サッカー新人戦

佐高のひと (ICT活用と異文化交流)

2017年、初任者として本校に赴任した私は、着任して間もなく、姉妹都市の「パーマ高校」への短期留学引率の機会を得ました。アメリカの高校を直で見ることにすら初めてだった私でしたが、教室に入ってびっくり、ICT教育設備が、日本とは比較にならないほど充実していたのです。

まず、各教室に大きな電子黒板は当たり前。先生は様々な画像や文献資料などを電子黒板に映し出し、そこに電子ペンで書き込みをしているのです。通常の黒板の半分ほどの大きさがあるので、黒板としての役割はもちろん、動画などを見ても迫力があります。

電子黒板が普通に置いてある教室に驚いたのも束の間、教科によっては全員が教室後ろにあるお弁当保温庫のようなキャビネットから一人ずつノートパソコンを取り出し、授業のノートを平然と取り、レポートを書き始めているのです。これが、最近の日本の教育現場でようやく導入され始めた「クロームブック」でした。

電子黒板に映された Google Classroom のサイトに書き込みながら「来週までにここに課題を提出しておいてください。また、ここに来週の授業の資料を置いておくので、しっかりと読んでおくように」と先生が指示しているのです。当時の日本では遠い先に思えた未来の教育現場が、パーマ高校ではもう既に始まっていることを痛感した瞬間でした。来年度のGIGAスクール構想にて、それが、いよいよ現実のものとなります。

こうした新しい教育スタイルにも、もちろん一長一短はあると思います。ですが、こうしたICT教育のおかげで、個々の特性に合った学習が実現出来る可能性が非常に高まるとも言われています。これは地域連携特例校の本校にとっても、生徒たちの個性を最大化するための重要な契機になると私は思います。

パーマ高校での交流を参考にしつつ、佐呂間高校ではデジタルとアナログの強みを活かせるのも、佐呂間高校の魅力です。(渡辺知陽/英語科・2年生担任)



写真は、引率したパーマ市で交流の様子。後列左端が私。